



「つながり」の中で“望む”こと

社会福祉法人足羽福祉会 理事長 高村昌裕

本年3月11日に起きた東日本大震災により亡くなられた方々のご冥福をお祈りするとともに、被災された方々および関係者の方々に対しまして、心よりお見舞い申し上げます。当法人としても、できる限りの復興支援をさせていただく所存です。

この震災によって、地震・津波といった自然のなせる「天災」のすさまじさに対する無力感、そして原発事故におけるリスク対策不備といった「人災」に対する憤りや不安の増幅といった、さまざまな感情が入り乱れながら私たちを覆っています。これまで経験したことのない問題となって、私たちの目の前に大きく立ちふさがりました。これからどう立ち直っていくのか、誰もが見通しをもてない現状です。

しかし、起きてしまった惨状に対して、私たち日本人が全体で悲しみを受け止め、冷静に助けを求め、互いに声をかけ励まし合うといった、自分以外の誰かとの「つながり」を大切にした行動があちらこちらで起きています。義援金や救援物資の搬送、人的派遣による救援活動といった具体的な支援以外に、毎日、日本中そして世界中から現地で被災された方々へのお見舞いや応援のメッセージが届けられ、被災地からのメッセージもメディアを通して流れています。

この誰かと「つながり」があるという感覚は、人が人として生きていく上で、本当に不可欠なものだと思います。最近「無縁社会」という言葉を耳にしますが、他の誰とも「つながり」を感じられない状態で、未来への願いや望みを抱けるのでしょうか。今、東北地方に向けられた「つながり」の輪が、一時的なものであってはならないと強く感じています。

このことは福祉サービスの根幹にも通じるものがあります。例えば食事・排せつ・入浴などの介護は、援助行為そのものだけがサービスというわけではなく、かわりを通して利用者の方と私たち職員が「安心」「満足」「信頼」「感謝」という「つながり」を感じることができます。それこそが私たちの大切にしているサービスであり、福祉職員としての醍醐味でもあるのです。今号の“望み”というテーマにそって、さまざまな形で利用者の方や地域社会との「つながり」をより太くしていこうとする各施設の取り組みを紹介させていただきます。

「地球規模で考え、足元から行動せよ“Think globally, Act locally”」という言葉にもあるように、東北地方の復興を願い続けながら、私たち自身のサービスをより確かなものにすべく、今後も誠心誠意取り組んでまいります。